

シンポジウム
《セネカとその時代》

報告者

島田 誠(学習院大学)

兼利琢也(早稲田大学)

木村健治(大阪大学)

司会

阪本 浩(青山学院大学)

2007年6月2日午後3時～6時
青山学院大学
主催 日本西洋古典学会

セネカの時代における政治と権力

島田 誠

本報告は、セネカの生きた時代の歴史状況、とりわけ政治と権力のあり方を明らかにすることを目的とする。その際、まずセネカの生きた時代、いわゆる「ユリウス・クラウディウス朝」時代、特にティベリウス以降の時代における政治の全般的特徴を述べ、次いでセネカが歴史の表舞台に登場したクラウディウス・ネロー時代の政治権力の特色を示したい。さらに、時間が許せば、セネカをはじめとする属州出身者(あるいはイタリア地方都市出身者)が、政治権力の中枢に如何にして接近していったかを考えたい。

アウグストゥスに始まる帝政、いわゆるプリンキパートゥスに関して、軍隊や行政機構の改革、支配階層の社会的構成などは早くから研究が進められていた。ところが、帝政成立期である「ユリウス・クラウディウス朝」時代において、権力の頂点に立つ皇帝の周辺にどのような人間集団が形成され、人々がどのようにして権力へ接近し、その果実を配分されていたのか、言わば「宮廷」社会の様相については具体的には描かれてこなかった。近年、ティベリウスからネローまでの皇帝を輩出した集団としてドムス・アウグスタ *domus Augusta* の存在やその高い地位が注目され、その中での権力継承者の育成、あるいは権力抗争の様相が明らかとなりつつある。そして、そのドムスの中での皇帝近親の女性や家政を担当する解放奴隷たちの政治的活動が改めて注目されている。さて、セネカが政治的に活躍したクラウディウスおよびネローの時代は、正しく女性と解放奴隷が積極的に政治に関与し、そのためにタキトゥスに始まる後世の歴史家によって批判された時代でもあった。そして、その時代は、セネカやかれの政治的パートナーであったブッルスなどの属州の騎士身分出身者が、帝国の政治権力の中枢部にたどり着いた時代でもあった。

今回の報告では、まずアウグストゥスの妻リーウィアが、夫の没後、息子ティベリウスの時代に果たした政治的地位について検討し、アウグストゥスの姪に小アントーニアが義兄のティベリウスや孫のガイウスの時代に果たした政治的役割も併せて検討する。その上で、「ユリウス・クラウディウス朝」期の政治権力の特徴とドムス・アウグスタと呼ばれる支配集団の性格と役割を考えて見たい。次いで、クラウディウスとネロー時代において、皇帝の解放奴隷たちが果たしていた行政的、政治的な役割を確認し、さらに皇帝近親の女性たち、特に小アグリッピーナの政治的な地位やその評価を考え直してみたい。そして、最後にセネカやブッルスたちと皇帝近親の女性や解放奴隷との関係と彼らの政権中枢への進出との関連について検討したい。

セネカの哲学著作の構造と修辞 —『怒りについて』を手がかりに—

兼利琢也

セネカの『怒りについて』全3巻は、現存著作中ではカリグラの治世に属する『マルキアに寄せる慰めの書』に続き、執筆は(少なくとも第1-2巻は)おそらく41年、クラウディウスの治世1年目で、彼の政治・執筆活動にとっても初期に属する。ストア派情念論を基に、兄ノウアートゥスに宛ててこの情念の徹底的な除去を説く作品である。今回の報告では、この哲学著作の位置付けとその意義について外的・内的観点から考察を加え、執筆環境、主題の扱いと著作の全体構造などの分析を通じて、セネカの哲学著作の特徴のいくつかを明らかにできればと考えている。

当時セネカは、公職序列を財務官の次まで進んだ気鋭の新人であり、宮廷側の認識を得たのみならず皇帝の逆鱗に触れる経験もした。新治世での倫理の書の刊行は己の実践的理念の最初の表明と言えるが、その主題は国家公共に関わるものではなく、個人の倫理、しかも情念という心の悪の表層である。この選択がカリグラに象徴される皇帝独裁に対する彼の意識と密接に関わることは、処々の暗示的言及からも明らかだが、問うべきは、それが行論と修辞に実際にどのような影響を及ぼしているかであろう。

そこで一つの手掛かりとして、キケローによる同主題の扱いと対比することを通じて相違点を明確にしたいと思う。キケローはカエサル独裁下に『トウスクルム荘対談集』第3、第4巻で情念を扱い、セネカと同じく正統派理論に拠りつつも重要な点でセネカと異なる行論を提示する一方、最後の実践倫理書『義務について』ではパナイティオスに拠りながらセネカと同じ論点をとる。キケローの扱いでは私性と公共性が隔てられており、論述もそれぞれ正統派と中期ストア派に基づいている。

セネカ『怒りについて』は、全3巻が第1-2巻と第3巻とに大別される。前者では、『トウスクルム荘対談集』と同様のストア派情念論の解説と防御・反論という理論的扱いが、具体的場面としては権力者の実力行使における怒りの自制と絶えず結びつけられ、指導者階層の倫理として公的意義を担う。同時に、他者危害と自己破壊の醜悪な様相の修辞的描写が両巻の外枠を成し、それらを通して哲学的にも論述形式にも一貫性がもたらされている。これに対して第3巻は、それが前の2巻と直接繋がるか、それとも何らかの断絶を見るかで見解が分かれている。私見では、第3巻は内容形式において前2巻との間に大きな隔たりがあり、それは主張の中心点、倫理の私的なものへの移行に集約されるように思われる。そうした相違の組成と生成を、修辞の構造、実例やトポスの使用法を通じて検討し、セネカの独自性の一端を明らかにできればと考えている。

劇作家としてのセネカ

木村健治

セネカ作と伝えられている悲劇は 10 編あるが、その中で、現在では、『オクタウィア』はほぼ確実にセネカ作ではなく、作者は不明ではあるものの、セネカ死後のフラウィウス朝に書かれたと考えられており、『オエタ山上のヘルクレス』もセネカ作に関しては疑問の余地無しとしない作品であると考えられている。残りの8編、『狂えるヘルクレス』、『トロイアの女たち』、『フェニキアの女たち』、『メデア』、『パエドラ』、『オエディプス』、『アガ멤ノン』、『テュエステス』は、確実にセネカ作だと考えられているが、これらの悲劇はセネカにとってどういう意味をもっていたのか、何故にセネカは悲劇を書いたのか。この問いは、いまだに解答を見ない難問であり、本発表でも、この問いに答えることは考えていない。本発表は、これも難問に違いないのだが、ローマ演劇の歴史の中でのセネカの位置するところを検討するものである。

ティトゥス・リーウィウスによれば、ローマで芸能が始まったのは、紀元前 364 年、本格的な演劇が始まったのが、紀元前 240 年である。Livius Andronicus により、ギリシア劇の翻訳で始まったローマ悲劇は、ちょうどギリシア新喜劇を元にしたローマ喜劇がパツリアータ劇と呼ばれたように、ギリシア悲劇を元にしたクレピダータ劇として、以後、Gnaevus Naevius, Quintus Ennius, Marcus Pacuvius, Lucius Accius さらに、共和政期から帝政期にかけても、Asinius Pollio とか Ovidius とかが悲劇の作者として名前が挙げられる。このクレピダータ劇の最後近くに位置するのがセネカであり、そう考えると、セネカの悲劇は、ローマ悲劇史の掉尾を飾る作品ということになる。

それでは、このセネカ悲劇は、上演用のものであったのか、朗唱用か、レーゼドラマであったのか？ 本報告は、問題を整理するために、まず、セネカの時代における演劇の様相を概観するところから始めたい。このとき、自死する前に、“Qualis artifex pereo!”と言ったと伝えられる皇帝の同時代人セネカの演劇環境を念頭におきつつ、「上演(performance)」の定義を検討する。さらに、セネカ作品の分析に、「メタシアター」という視点を導入してみたい。ここ数年でセネカ悲劇に関して公にされた研究の中でも、George W. M. Harrison(ed.), *Seneca in Performance*(London, 2000), Mario Erasmo, *Roman Tragedy: Theatre to Theatricality*(Austin, 2004), A. J. Boyle, *An Introduction to Roman Tragedy*(London and New York, 2006) などが、参照されるであろう。